

# 幽靈美容室

黒咲雪治

## 第1項

---

そうか、親父もこんなキモチだったんだな…

通りを行き交うわずかな車の音  
時々聞こえる歩く人のため息  
店の前にある木々がさえざる葉の音  
俺はこの街で小さな美容室を営んでいる。  
店の名前は「ビューティー・アライ」

両親が営んでいたこの小さな美容室  
幼い頃の俺にとっては最高の遊び場だった

赤く染まったり  
毛糸の様にねじれていったり  
そんな風に変化していく様々な人達と  
ガキだった頃の俺は毎日色んな話をしては  
遊んでもらっていた。

意識はしていなかったものの  
気付けば俺も親父と同じく  
その小さなはさみを握る仕事を  
選ぶ道を進んでいた。

若かった俺はこの小さな田舎街で  
親父が営むこの店の2代目にはなりたくなかった。

もっとおっきな街でおっきな美容室を経営して  
日本一のカリスマ美容師になるんだ！って  
専門学校も都心の学校を選び、街の美容室で働いていた。

正直自分で言うのも恥ずかしいが  
本気で日本一を目指していた俺は  
コンクールでも何度か賞を獲り  
少しずつだが雑誌でも取り上げられ  
俗にいうカリスマ美容師として  
だんだん認知され始めていった。

…そんな矢先だった。

お袋からの一本の電話

コトバにならない声

ただ、ただ泣きじゃくるお袋。

交通事故だった。

そう、ニュースで見れば1分にも満たない内容で

あっという間に過ぎて行く、所詮他人事のようにだった

そんな交通事故で親父は写真の中の人になった。

来年で50になる…

”中年”って書く

その歳で。

お袋は技術者じゃなかった。

シャンプーをさせればそれこそ右に出るものは居ないって

今でも自信を持って言える。

けれど当然シャンプーだけ出来ても美容室は出来ない。

葬儀のために帰った俺は

何も深く考えないままこの店を継ぐといい放ち

あんなに頑張っていた街の店をあっという間に辞め

2代目としてこの店の店主になった。

妻には正直反対された。

ガキだってまだ幼い。

けれど俺の意思は固かった。

今考えてみれば何故あの時”継ぐ”と言ったのかさえも分からない。

あれから何年だろうか…

昔なじみの客ばかりのこの店も

最近じゃ滅多に客なんて来やしない。

もともと登山が好きだった親父が  
山の休憩所みたいな店にしたいと  
ロジハウスみたいな建物に様々な植物を茂らせた。  
そのなんとも言えないたたずまいから近所ではこう呼ばれていた

”幽霊美容室”

それでなくてもそんな風に呼ばれているのに  
これだけ客がこなけりゃまるで墓場のよう。

そうだな、美容師の墓場だな。

あきらめ半分

まるでセミリタイアしたかの様な暮らし  
ぬるめのコーヒーと繰り返し流れるビル・エヴァンスのピアノの音  
飾られたいくつものコンクールでの賞状を眺め  
昔の栄華を思い出しちょっぴりオセンチになってみたりする。

今日も握る事の無い俺の相棒を磨いて  
帰り支度でもしようかとしていたその時だった。

カランコロン

響くドアの鐘の音。

「わたしの髪…切ってもらえますか？」

## 第2項

---

久しぶりの客。

「あ、どうぞどうぞ。」

俺は飲みほそうとしていたコーヒーを片手に持ったまま  
その突然来たお客様をとりあえず席に案内する仕草をした。

「あの…切ってもらえますか？」

変な客だ。

こちらはどうぞって言ってるのになかなか席に着こうとしない。

片手に持ったコーヒーが気に食わないのか？

ミルクティーだったらよかったのか？

「はい！もちろんですよ。うちは美容室ですから。」

少しおどけた様に応えた俺にその客は  
なんだか驚いたような安堵を示すかのような表情で  
少しずつ席に向かい始めた。

「本当に切ってもらえるんですね？」

なんだか変な客だ。

何よりもその風貌だ。

とにかく伸ばしに伸ばしたような長い黒髪。

腰ぐらいまであるだろうか。

毛先を見る限り美容室自体が久しぶりという感じで

伸ばしているって言うコトバよりも

伸ばし放題にしたって言う方が正しい感じ。

グルメリポーター風に言うならば”髪の毛のバイキング”やな。

俺はそんな下らないことを考えながらその客を席に案内し  
ようやく腰をおろさせた。

「いらっしやいませ。今日はどうしますか？」

そう言いながら鏡越しに客の顔を覗き込む。

「あの…切りたいんです。」

分かりましたよ。そうでしょうとも。

うちは美容室ですからね。

パーマだろうがカラーだろうが、

何にせよこの手入れしてない髪は

とにかく毛先だけでも切らないとって感じですよ。

にしてもこんな客が来るから

うちは”幽霊美容室”だなんて言われちゃうんだろうな。

頭に三角の白い布でもつけようなものなら

誰がみたって完全に”正統派幽霊”。そんな風貌の客だった。

「かしこまりました。毛先を整える感じでよろしいでしょうか？」

ここまで伸ばした髪だ。

それはそうだって勝手に決めつけながら

とりあえずクシを手に取り相棒を握った瞬間だった。

「あの…ショートカットにして下さい！」

決めつけた俺も悪かったんだが

あまりに意外だった。

実際はそんなに珍しいことでは無いのだが、

こんなに伸ばしたんだよ？

失恋でもした？重くて肩が凝っちゃう？

んで肩が凝りすぎちゃってフライパンも握れない？

もう悩んで悩んで夜も眠れなくなっちゃった感じ？

そんな下らない疑問を繰り返した。

「え？本当にいいんですか？」

そう聞く俺にその客は静かに頷く。

ほ～～。

いいんだな。本当にいいんだな。  
後で後悔したって知らないんだかな。  
エクステなんかで簡単に長く出来るたって  
やっぱなんだか違うんだかな。

『あ〜切っちゃった。  
自慢の長い髪なのに、もう私新しい恋に向かってまっしぐら』

とかCMみたいなこと言ったってふとした瞬間に鏡覗き込んで  
あ〜私なんてことしたんだろって泣き崩れても知らないんだかな。

そんな風にこっそり頭で独り言を繰り返した。

「じゃあ切っちゃいますよ。」

ただ静かに”はい”とだけ言う客。

まあこういう時は色々詮索せずに静かに淡々と切るべきだな。  
よしよし。そうしますよ。  
いくら久しぶりだとはいえ俺もプロのはしくれですからね。  
ご希望の通りにいたしますよ。

俺はちょっとためらいがちに相棒を握りしめその長い髪に手を伸ばす。  
ヨシとちょっと呼吸を整え髪に刃をあてる。

「本当に大丈夫ですか？」

突然その客が口を開いた。

え？いや、それはこっちの台詞だよ。  
あれ？久しぶりな感じバレてる？  
いやいや、俺だってカリスマって言われてたんだから  
いくら久しぶりだって大丈夫っすよ。

「本当に切ってくれるんですね。」

本当に変な客だ。

もしかして切った瞬間に歯がボロボロになったりするくらい  
超カッチカチの髪なのか？  
カッチカチやでとか言わせないよ。

「いや…大丈夫ならいいんです。お願いします。」

おおっ。なんだか俺の方が不安になってきたよ。  
いやいや、久しぶりのお客様なんだから  
気合い入れていかせてもらいますよ。

相棒を握り直し  
ゴクリと唾を飲み込んで  
俺はその不安と髪を切ることにした。

ザクッ。  
静かに響く音。

うああああ。やっちゃったよ。  
切っちゃったよ。てか別に普通じゃん。  
むしろいい髪質だよ。  
う〜ん久しぶりの感触。  
こんなこと想ってるから不安がられちゃうのかな？  
いかんいかん集中集中。

「お客さんいい髪質ですねえ。」  
「ありがとうございます。」  
「どれくらいまで切っちゃいますか？」

そう聞く俺に客は”おまかせでいい”と答える。

やっと進みだした会話。  
その客の名前は”奈美”。  
小さなカフェで働きながら趣味で絵を描いたりしてるらしい。  
美大を目指していたこともあるらしく  
確かに服のセンスもいいし、メイクの腕前も大したものだ。  
よく見ると子猫のような目をした小悪魔の雰囲気を持つ子だ。  
周りの男はほっておかないだろうな。

そんな風に想いながら髪を切ってる最中だった。

「どうして短くされるんですか？」

やってしまった。

言わないでおこうと最初に決めていた台詞を  
ようやく流れ始めた温かい会話の雰囲気にも飲まれて  
いとも簡単に吐き出してしまった。

「彼氏がですね、いや正確には別れた彼氏なんですけど、ショートカットが大好きだったんですよ。」

予想通りの失恋話。

ただ彼女の場合はちょっと違った。

別れた彼が絶対に似合うって言ってたそのショートカットを  
別れた今になって挑戦しようと思ったと  
そう話す彼女は随分と楽しそうだった。

「こういうのって聞く方がなんだか気まずいですよね。」

そう言いながら目を細めながら笑う彼女。

逆にこちらに気を遣うかのように素敵な笑顔を浮かべる。

きっかけが欲しかったかのように

そこから彼女は別れた彼とのことを話し始めた…

### 第3項

---

奈美と元カレが出逢いは何気ない毎日の中であまりに突然だった。

女の子には好かれない見た目からなのか  
上辺だけで付き合う関係に嫌気がさしたのか分からないが  
奈美には友達と呼べる存在が少なかった。  
一生懸命勉強して行った高校も周りになじめなくてあっという間に辞めてしまった。

そんな奈美にとって数少ない友達のひとりが”絵里”。

絵里といると気兼ねせずに何でも話せる。  
自宅にいてもなんだか落ち着かなかった奈美は気付けばいつも絵里と一緒にいた。

そんなある日いつもの様に絵里と街でぶらぶらしていた時、  
突然話しかけてきた男がいた。  
それがその後付き合うことになる”義英”だった。

絵里は奈美と違い随分と社交的で、バンドの追っかけをする所謂”バンギャ”だった。  
絵里が追っかけしていたバンドは地元でもかなり有名なヴィジュアルバンドで  
中でもボーカルの優はすごい人気だった。

その優と幼なじみでたまたま奈美と高校の同級生だったのが義英。  
義英もまた将来プロのミュージシャンを目指すバンドマンだった。  
義英はどちらかというとな受けなパンクバンドのギタリスト兼ヴォーカルで  
絵里にとっては単に優と繋がるためだけの友達。  
ファンでもなんでも無くただの知り合いレベル。  
見た目もどちらかというとな受けする感じでは無い。  
奈美が初めて義英に出逢ったときも  
決してカッコいいと呼べる服装では無かった。

それなのになんとかチャライ。  
しゃべり方のせいだろうか、とにかくチャライ雰囲気。

その日義英は次に行うライブのチケットを絵里に買ってくれとせがんだ。  
絵里はその日は都合が悪いからと断り続けていた。  
どうしても後1枚売れないと困ると頼み続ける義英に

絵里はふと閃いたように奈美にこう言った。

「奈美行きなよ。」

あまりに突然のことでびっくりしたが  
一生懸命頼みこむ義英の姿と  
絵里のそのあまりに勝手な提案に大喜びする義英の姿に  
まったく興味が無かった奈美ではあったが  
何故だか行く事を承諾した。

出逢いはそんな感じだった。  
なんだか情けない印象。  
バンドマンとか何言ってるんだかって  
そんな印象しか無かった。

元々絵がうまかった奈美は  
学生の頃数々のコンクールを受賞する腕前の持ち主だった。  
美術学校へ行くことも勧められたが、決して裕福では無い家庭で育った彼女は  
そんな金持ちの道楽のような仕事はできないと言い  
本当は大好きだった絵の道へ進むのを断念した。

そんな彼女だったから、音楽で食べて行こうなんて考える夢追い人は大嫌いな存在だった。

義英も奈美にとって最初はそんな存在だった。

乗り気がしないまま向かった小さなライブハウス。  
絵里の突然の提案でなぜだか行く事になってしまい  
よくよく考えたらなんで行かなきゃならないんだと苛立ちながらも  
根っからのお人好しの奈美はその場にいた。

会場は出演バンドの友達とその友達って感じで、なんだかアットホームな雰囲気。  
知り合いなんか居ないその場所で奈美は独り場違いな雰囲気を出していた。  
最初のバンドの演奏が終わり、やっぱり帰ろうと想ったその時だった。

鳴り響くギターハウリング音。  
さっきまでのアットホームな雰囲気が一瞬にして凍りついた。

幕が開く。義英のバンド”R-GUARDIAN(リアルガーディアン)”だ。

その時の衝撃は今でも忘れない。奈美はそう語った。

見た目も決してカッコいいわけではない

服のセンスだって微妙だって想ってた。

しゃべり方もチャラくて嫌だと想った。

でもそこにいる義英は、

絵里に必死で頼み込む捨てられた子犬のような

そんな姿はどこにも無かった。

まるで別人。

会場は一気に熱くなる。

モッシュと言われる身体をぶつけ合う行為で会場は渦潮のようにうねる。

漂流する難破船のようにただ立ち尽くす奈美。

その会場のうねりに中で気付けばギターを弾く義英の前にいた。

MCも無く一気に駆け抜ける演奏。

無理矢理連れて来られたはずのライブ。

けれど気付けばもう夢中だった。

義英がかき鳴らすギターの音の虜になった。

荒々しいまでの演奏を続ける義英が一瞬、奈美の方を見た気がした。

さっきまで嫌いなタイプだとまで思っていた奈美が

もっと見て欲しいとまで想った。

そして何よりも義英が紡ぐその音に体中が反応した。

30分にも満たない演奏が終わり幕が閉まる。

もっと聞きたい。そう想った。

放心状態だった奈美が気付いた時はすべてのライブの演奏が終わった後だった。

会場を片付け始めるライブハウスのスタッフ達。

さっきまでの衝撃が忘れられずに立ち尽くす奈美。

「最高でしょ？」

義英だった。

奈美はなぜだか泣き出した。

突然の涙に驚く義英。

「おい、なに彼女泣かせてんだよ」

はやし立てるバンド仲間。

どうしていいか分からずとにかく近くのカフェに連れて行かれた。

今でもその時の感情がよく分からないと語る奈美。

ただ義英に声をかけられた時、何故だか分からないがホッとした。

そしたら何故だか泣き出してしまったらしい。

人前で泣くことなんか滅多に無い奈美がわんわん泣きじゃくった。

カフェに来てどれくらい経ったのだろうか

ふと気付くと義英の笑顔がそこにあった。

「大丈夫か？なんか悪かったな。」

そう申し訳無さそうに照れたように笑う義英に奈美は言った。

「ありがとう…」

それから気付けば毎日一緒に居た。

奈美は義英の音が大好きだった。

きっかけになった絵里もびっくりする位のラブラブだった。

義英が居ないと生きた心地がしないくらい

奈美にとって義英はかけがえの無い存在になった。

「あれからもう4年も経つのか…」

さっきまで瞳を輝かせながら馴れ初めを話していた奈美が

突然切ない声色に変わった。

## 第4項

---

実家にいることに窮屈を感じていたこともあってか  
奈美は義英の住む小さなボロアパートで  
付き合い始めてすぐに自然なカタチで同棲を始めた。

正直、裕福とは程遠い二人の暮らしは  
決して楽なモノでは無かった。  
それでも一緒にいられる時間が大切だった。

奈美は少しでも一緒にいられるようにと  
二人が付き合いだしたきっかけになったライブハウスの近くのカフェで働きだし、  
義英も生活の為に働くバイト以外では出来るだけ奈美と一緒にいた。

けれどそれは2年を過ぎた頃から徐々に変わっていった。

義英のバンドも少しづつだが有名になり、  
地元でもそこそこ知れ渡る存在になっていった。  
地元以外でもライブをすることが増え  
長期のツアーに出ると半年は帰って来なくなった。

ずっと側にいるはずの義英が側にいない。

奈美は毎日携帯電話を握りしめ、  
義英が帰って来るであろうその家で  
そっと寂しさと愛しさを抱きしめながら過ごしていた。

ずっと側に居たはずの人が側にいなくなる…。

「空気みたいな存在だってよく言いますけど、  
空気が無かったら生きていけないですよね？」

奈美は少しづつ切られていくその長い髪を見ながら、  
鏡越しに俺に笑顔を浮かべてきた。

なんとも意地悪な笑顔だ。  
満ちあふれる楽しさと、その裏に隠れる寂しさを両方兼ね備えた様な不思議な笑顔。

鏡越しでも分かるその美しさに  
俺さえもそっとココロが奪われそうになった。

「愛してるってコトバだけで救われる。  
そんな風に想わないようにしてきたんです。」

いつみてもラブラブなふたりであったが、  
義英は決して奈美に愛を語りはしなかった。  
そんな義英に呼応するかの様に、  
奈美もコトバなんか必要無いと想う様に過ごして来た。  
一緒にいる二人の時間がそう想わせてくれていたからだ。

ただし、それは一緒に居られたからの話。

3年も過ぎた頃、義英のバンドが2度目の全国ツアーを回る話が持ち上がった頃だった。

友人を大切にするタイプだという義英は  
徐々にバンド関係の人との付き合いも増えてきて、  
地元においてもあまり一緒に過ごせなくなっていた。  
その日も義英はいつもの様に先輩と飲み会があると言って  
奈美をひとり残し家を出た。  
奈美は独り寂しく家で義英の帰りを待ちながら、  
義英が食べるであろう食事の用意をしていた。

ブーブー

小刻みに震える携帯のバイブの音。  
ふと自分の携帯に目をやるが鳴ってはいない。

ブーブー

枕元にあるひとつの携帯が着信ランプの光とともに目に飛び込んだ。

義英の携帯だ。

おっちょこちょいな性格なんだからと思いながらも、  
奈美は気にしないようにした。

徐々に人気が出てきた義英のバンドは、  
少しづつだが女性ファンも増えていた。  
友人の絵里は奈美に最近義英が  
他の女と居る所を見た等としなくてもいい報告をたまにくれていた。  
疑ったらダメだと思い奈美は義英にそのことを聞きもしなければ、  
ましてや携帯の中身を見ることなんて勿論しなかった。  
義英は今までも何度と無く携帯を忘れることがあった。  
そんな時でも絶対に奈美は携帯を見ない様にしてきた。  
…そう、見ない様にしてきたのだ。

けれどこの日は違った。

ブーブー

3度目の着信。  
奈美の料理を作る手が止まる。  
気付けば義英の携帯を握りしめていた。

「着信：留美」

震える奈美のその手の中で残酷にも  
義英の携帯は青くその文字を照らしだしていた。  
そこからはもうあまりちゃんと覚えてはいない。  
堰を切った様に溢れ出す涙で滲む文字。  
そこには決して奈美に語られることのなかった愛のコトバ。  
いくつもの愛のやり取りが記されていた。

先輩と飲みに行くに出ていった義英が、  
本当は違う目的で出ていったこともすぐに分かった。

呆然と座り込む奈美。  
台所ではさっきまで奈美が料理をしていた鍋が吹きこぼれる音が  
ただ静かに鳴り響いていた。